福岡教育大学紀要，第57号，第４分冊，85―92（2008）

登校回避感情の測定は，頻度によるのか強度によるのか
―双方からの測定の試み―[1)]

Which is effectual on the measurement of the school avoidance feeling, by the strength or by the frequency?
－ An attempt of measurements by both －

中　島　義　実　　原　　明　子

Yoshimi　NAKASHIMA　　Akiko　HARA

（福岡教育大学）　　（行橋市立仲津中学校）[2)]

（平成19年10月１日受理）

要約

児童生徒の学校適応に関する研究や，不登校のアナログ研究などで広く試みられている登校回避感情の測定は，従来，「強度」による測定と，「頻度」による測定とが混在していた。しかし，強度と頻度とでは意味合いが異なり，得られた知見の単純な比較考案等には疑問の余地が残る。そこで，「強度」と「頻度」との双方から測定する試みを行った。298名の中学生被験者は，クラスター分析により，５つの群に分類された。各群について登校回避感情の促進要因や抑制要因との関係を検討したところ，群によって異なる様相が見出された。双方から測定することの意義が確認されたと考えられる。

キーワード：登校回避感情，測定，強度か頻度か，促進要因，抑制要因

１．問題と目的

登校回避感情という概念が本格的に登場したのは，森田(1991)が，不登校ないしはそれに類似する不適応状態にある児童・生徒の研究に用いて以降のこととみられる。森田は，児童生徒が実際にどれほど欠席しているかどうかにかかわりなく，学校に行きたくないと思う気持ちを，登校回避感情と名づけた。そして欠席せず通学しつつもこの感情をもっている者を「不登校のグレイゾーン」と呼んだ。

これ以降，不登校のアナログ研究や，児童生徒の学校適応に関する研究などで，登校回避感情の測定がさまざまに試みられるようになった。「不登校欲求」「欠席願望」など，微妙に内容や目的の異なる変数も提案されているが，本研究においては，それらも含む包括的な総称概念として「登校回避感情」の語を用いることとし，その測定に関する問題点を検討することとする。

さて，不登校のアナログ研究においては通常，登校してきている児童生徒を対象に登校回避感情を測定し，値の高いものを不登校の児童生徒と類似した状態にあるとみなした。そのうえで，登校回避感情を促進する変数や，抑制する変数との関係が検討された。不登校傾向をもつ児童生徒へのアプローチや，登校してきている児童生徒への予防的アプローチなどをも念頭においてのことである。渡辺・小石(2000)，伊藤(2002)，松井(2002)などが，これにあたる。

一方，登校回避感情の値の高さを，不登校に限らず，学校への不適応状態一般を表す変数のひとつとして用いてきた研究もある。高旗・山本(1998)，本間(2000)，久能・打矢(2001)，神田・大木(2001)，などがこれにあたる。これらにおいても，登校回避感情に関しては，これを促進する変数や，抑制する変数との関係が検討されている。

以上のように，学校不適応ないしは不登校近似状態の指標として測定されてきた登校回避感情であるが，他方で本城(1996)のように，そのような

[1)] 本研究は，第１筆者の指導のもと，第２筆者が平成17年度に福岡教育大学初等教育教員養成課程教育・心理・幼児教育コースに提出した卒業研究の内容に基づいている。

[2)] 本稿受理時点での所属

感情は心理的に健康な児童生徒においてもごく普通にみられる現象であるとする立場もある。この場合，登校回避感情そのものは，不登校との類似や不適応などを一義的に示すとは限らないこととなる。この立場から登校回避感情を測定するならば，その結果は，あくまで登校回避感情という一感情の状態を表す訳であり，他の変数との関係を検討することで，あらためて，この概念の位置づけを検討しなおすこととなる。

さて，いずれの立場からであれ，なんらかに登校回避感情の測定がなされるわけであるが，ここにひとつの，未検討の問題がある。登校回避感情の測定は，通常質問紙法によってなされる。このときに，その評定を，登校回避感情を感じる「頻度」によって行わせている場合と，登校回避感情を感じる「強度」によって行わせている場合とがあり，その相違については検討されていないのである。

頻度で評定させる場合とは，「いつもある」「よくある」「あまりない」「まったくない」等の，頻度を表す語によって評定をさせる場合のことである。

強度で評定させる場合とは，「強く感じる」「やや強く感じる」「やや弱く感じる」「ほとんど感じない」等の，強度を表す語によって評定をさせる場合のことである。

このとき，たとえば，4件法を用い，どちらの場合でも各項目の最高評定値を4と設定した場合，「いつも感じる」児童生徒も，「強く感じる」児童生徒も，測定値上は4という同じ値として扱われることとなる。しかしながら，「いつも感じる」ことと「強く感じる」こととは，同じ事態を表しているとみなしてよいのであろうか。

たとえば，「なんとなく，うっすらと，学校に行きたくないと感じている」という感情を「いつも感じている」児童生徒の場合，頻度で4段階評定すれば測定値は4となる。一方，強度で4段階評定すれば，段階設定の表現語にもよるが，1ないしは2ということになるであろう。少なくとも4となることはない。すなわち，ある1人の児童生徒の同一の状態の指標変数であるのに，測定法によって，かなり異なる様相を呈してしまう。

逆に，「普段ほとんど，学校に行きたくないと思うことはない」のだが，ごくたまに，「非常に強い嫌悪感を学校に対して感じる」という児童生徒の場合，頻度で4段階評定すれば，1となるであろう。しかし強度としては，やはり段階設定の表現語にもよるが，3ないしは4となる可能性がある。測定法による様相の相違がやはり生じる。

こうなってくると，同じ「登校回避感情」をめぐる研究結果であっても，測定が「頻度」でなされた場合の知見と，「強度」でなされた場合の知見とを，単純に照合したり比較検討したりすることには問題が残ることになる。

先行研究においても，先にみた伊藤，神田・大木，久能・打矢，松井などは「頻度」で測定している一方，本間，高旗・山本，渡辺・小石などは，「強度」による測定を用いている。

したがって，これらから得られている知見を総合するためにも，「頻度」と「強度」の相違をふまえ，双方に視点をおいた研究の進展が望まれる。

そこで，本研究においては，登校回避感情を，頻度と強度との双方の組み合わせによって測定することを試みる。そして，そのようにして測定された登校回避感情について，あらためて，その促進要因や抑制要因をみていくこととする。

2．方法

被験者は中学生298名（公立中学校2年生。男子147名，女子151名）であった。

調査に用いた質問紙は，以下の項目から構成した。

(1)　登校回避感情

測定項目を，強度にしたがい4項目設定し，各項目について感じる頻度を4件法で評定させた。具体的には，表1のような形式で評定させた。

表1　登校回避感情の，強度・頻度双方からの測定項目

	よくある	時々ある	あまりない	全くない
学校に行きたくないと，ほんの少し思うことがある。……	4	3	2	1
学校に行きたくないと，少し思うことがある。……	4	3	2	1
学校に行きたくないと，強く思うことがある。……	4	3	2	1
学校に行きたくないと，非常に強く思うことがある。……	4	3	2	1

表２　登校回避感情の評定に関するクラスター分析（「強度」）項目への「頻度」評定値

クラスター	1	2	3	4	5	分散分析	
	N=108	N=66	N=46	N=48	N=30	F 値	多重比較
ほんの少し思う	3.32	1.68	3.80	3.15	2.03	140.22**	3>1,4>5>2
少し思う	3.17	1.45	3.74	2.13	2.00	165.82**	3>1>4,5>2
強く思う	2.29	1.00	3.61	1.00	2.53	267.57**	3>1,5>2,4
非常に強く思う	1.49	1.00	3.43	1.00	3.00	266.88**	3>5>1>2,4

表３　促進理由に関する因子分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
【孤独･対人不安】(α=.937)								
28 学校に居場所がないとき	**.830**	.101	.027	−.026	.033	.117	.101	.759
25 仲間はずれにされたとき	**.824**	.070	.107	.119	.070	.138	.084	.744
18 いじめにあったとき	**.792**	.027	.014	−.026	.107	.043	.179	.769
27 気の合う友達がいないとき	**.791**	.190	.045	.089	.025	.206	−.019	.759
32 休み時間に居場所がないとき	**.783**	.164	.056	.063	.098	.051	.131	.749
31 仲のよいグループがないとき	**.758**	.239	.032	.083	.097	.105	.162	.805
8 いじめる子がいるとき	**.715**	.078	−.080	−.044	.208	.013	.181	.731
22 友達にいやなことをいわれたとき	**.712**	.080	.158	.189	.090	.029	.073	.652
7 友だちとけんかしたとき	**.688**	.038	.077	.169	.205	−.042	.038	.570
【気分・学校外誘因】（α＝.861）								
14 出かけたいところがあるとき	.090	**.668**	.117	.166	.201	.084	.031	.549
26 登校の準備がめんどうくさいとき	.023	**.626**	−.023	.042	.155	.017	.029	.434
30 行くまでがめんどうくさいとき	−.061	**.617**	.194	.160	.032	.053	.033	.454
21 家でやりたいことがあるとき	.181	**.611**	.231	.120	.060	.121	.013	.506
4 おもしろいテレビやラジオの番組があるとき	.106	**.606**	−.030	.041	.218	.162	.051	.463
12 なんとなく行きたくないとき	.137	**.542**	.432	.186	−.030	.115	.056	.555
20 休みの次の日	.017	**.509**	.262	.351	−.073	.102	−.077	.474
34 人に会うのがめんどうくさいとき	.171	**.480**	.124	.026	.045	.074	.175	.319
19 いやな行事があるとき	.248	**.440**	.320	.286	.047	.075	.013	.457
16 友達が一緒に休もうといっているとき	.107	**.396**	.192	.105	.142	.061	.109	.252
15 とても天気が悪いとき	.278	**.386**	.082	.144	−.021	.082	−.012	.261
【疲労･身体因】(α=.756)								
17 つかれているとき	.152	.491	**.568**	.219	.015	−.060	.113	.652
9 ねむたいとき	−.049	.499	**.553**	.170	.023	.044	.043	.595
11 朝寝坊したとき	.102	.148	**.501**	.082	.243	.241	−.043	.420
3 少し頭やおなかが痛いとき	.038	.281	**.495**	.081	.208	.096	.033	.381
【学習意欲低下】(α=.715)								
2 きらいな教科があるとき	.180	.213	.259	**.598**	.158	.123	−.024	.548
13 勉強の科目がおおいとき	.048	.335	.246	**.579**	.111	.080	.024	.533
1 テストがあるとき	.068	.177	−.054	**.578**	.110	−.038	−.011	.395
24 勉強がわからないとき	.174	.163	.043	**.350**	.340	.257	.126	.388
【教師回避】(α=.672)								
5 先生に強くしかられたとき	.246	.225	.124	.174	**.664**	−.018	.144	.622
6 宿題や提出物ができていないとき	.233	.096	.195	.163	**.410**	.157	−.038	.324
10 きらいな先生と会うとき	.100	.384	.222	.269	**.393**	.077	.185	.479
【家庭内問題】(α=.728)								
29 家庭内がごたごたしているとき	.215	.210	.050	.073	.016	**.730**	.019	.632
35 家でいやなことがあったとき	.102	.185	.219	.051	.138	**.648**	.186	.569
【暴力性脅威】(α=.646)								
36 暴力を受けたとき	.390	.059	−.026	−.071	.076	.113	**.660**	.617
33 脅迫されたとき	.545	.092	−.019	.079	−.034	.102	**.576**	.659
23 部活がきびしいとき	.096	.193	.132	.022	.210	.049	**.323**	.219
2乗和	6.302	4.534	2.002	1.827	1.378	1.361	1.188	
寄与率(%)	17.5	12.6	5.6	5.1	3.8	3.8	3.3	51.6

(2)　促進要因

登校回避感情の促進要因を検討するために，以下の項目を採用した。

本間(2000)の「欠席を促進する理由」17項目および松本・藤生（2003）の「欠席促進理由」4項目に，相田・一谷・小谷（1992），渡辺・小石(2000)，松井（2002），内田•盛永（2003）を参考に15項目を加え，計36項目とした。

(3)　抑制要因

登校回避感情の抑制要因を検討するために，以下の項目を採用した。

本間（2000）の「実際に学校に行っている理由」16項目および久能・打矢(2001)の「実際に学校に行っている理由」8項目に，相田・一谷・小谷(1992)，松本・藤生（2003），内田•盛永(2003)，五十嵐・萩原(2004)を参考に12項目を加え，計36項目とした。

表4　抑制要因に関する因子分析

	F1	F2	F3	F4	F5	F6	F7	共通性
【道具的理由】(α=.848)								
6　将来のため	**.742**	-.020	.144	.169	.032	.072	-.019	.605
8　高校にいくため	**.739**	.044	.085	.075	.010	.127	-.010	.578
21　自分の将来につながる勉強ができるから	**.586**	.061	.395	.218	.015	.165	-.066	.583
3　勉強がおくれるから	**.584**	.026	.134	.017	.265	.073	.038	.437
15　勉強しなければならないから	**.557**	.146	.247	.261	.189	.150	.024	.519
16　みんなと差がつくから	**.477**	.183	.263	.181	.246	.197	.173	.492
11　勉強したいから	**.417**	.081	.382	.094	.079	.047	-.237	.400
【楽しさ】(α=.815)								
28　いけば楽しいこともあるから	.182	**.700**	.298	-.058	.040	.035	-.011	.615
5　学校が楽しいから	.072	**.671**	.175	.121	-.058	-.012	-.180	.536
31　家にいるよりも楽しいから	-.026	**.667**	.090	.053	.049	.016	-.033	.460
33　いってしまえば楽しいから	.044	**.657**	.198	.037	.129	-.016	-.099	.491
1　友達とあえるから	.058	**.643**	.043	.127	-.142	.083	-.059	.462
18　楽しい行事があるから	-.028	**.407**	.382	.027	.056	.126	.011	.332
【向上心】(α=.860)								
19　新しいことに挑戦できるから	.199	.235	**.714**	.115	-.017	.076	-.051	.626
29　学校でしか学べないことがあるから	.325	.263	**.685**	.125	.026	.064	-.083	.671
24　家ではできない体験ができるから	.183	.303	**.664**	.038	.037	.051	-.043	.574
14　自分で何事もできる力をつけるため	.364	.179	**.636**	.132	.056	.182	-.050	.626
【社会通念】(α=.746)								
10　いくことが当然だから	.178	.112	.040	**.856**	.085	.132	-.064	.807
13　あたりまえになっているから	.204	.207	.176	**.533**	.115	.160	.015	.439
4　いかないのは悪いことだから	.211	.050	.168	**.522**	.321	.039	.109	.465
【欠席自体への抵抗感】(α=.652)								
30　休みがちだと思われたくないから	.052	.026	.041	.087	**.712**	.167	.099	.558
32　休むといきにくくなるから	.142	.134	-.042	.072	**.625**	.051	.078	.444
27　休む勇気がないから	.073	-.111	.051	.110	**.447**	.069	.123	.252
【親への配慮】(α=.888)								
17　親に心配をかけたくないから	.262	.080	.172	.146	.213	**.836**	-.054	.874
22　親を悲しませたくないから	.263	.047	.152	.180	.195	**.756**	.035	.738
【親圧力】(α=.716)								
7　親がいけというから	-.028	-.113	-.024	.029	.166	.010	**.757**	.617
2　親におこられるから	.012	-.026	-.117	-.078	.143	-.017	**.692**	.515
2乗和	3.134	2.822	2.750	1.645	1.579	1.539	1.246	
寄与率(%)	11.6	10.5	10.2	6.1	5.8	5.7	4.6	54.5

3．結果

(1)　登校回避感情

頻度と強度との双方から評定させた4項目への評定パターンから被験者を分類するために，平方ユークリッド距離検定によるクラスター分析（word法）を行った。デンドログラムおよびクラスター結合距離から，4ないしは5クラスターが妥当であるとみられた。

そこで，4クラスターの場合と5クラスターの場合それぞれについて，分散分析による検討を行った。4クラスターの場合，結果として，4群が頻度，強度，どちらの観点から見ても同一の順序で有意差がみられる結果となり，双方向から検討したことによる固有の所見が得られないと判断された。一方5クラスターの場合，その限りではない様相がみられたので，これを採用することとした（表2）。

(2)　促進要因

促進要因36項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。その結果，7因子が抽出された。各因子については表3のように命名された。

(3)　抑制要因

抑制要因36項目について因子分析（主因子法，バリマックス回転）を行った。その結果，7因子が抽出された。各因子については表4のように命名された。

(4)　登校回避感情の抑制パターン

登校回避感情の頻度と強度によって分類された5群各々について，どのような要因が登校回避感情を促進したり抑制要因したりするのか検討するために，登校回避感情を基準変数とし，促進要因および抑制要因の各因子を説明変数として，重回帰分析（ステップワイズ法）を行った（表5）。基準変数である登校回避感情の値については，強度にもとづき設定された4段階の各項目の数値に，頻度にもとづき評定させた各評定値を乗じて算出した。

4．考察

(1)　分類された5群の生徒は登校回避感情をどのように感じているか

今回の被験者は，登校回避感情のもち方のパターンによって，表2のように5群に分類することが

表5　登校回避感情の促進要因、抑制要因（重回帰分析）

クラスター	1	2	3	4	5
＜促進要因＞					
孤独・不安					.582**
気分・学校外	.308**	.506**			
家庭問題			.378**		
＜抑制要因＞					
楽しさ			-.509**		
社会通念					-.306*
R2乗	.095	.256	.341	.120	.431

**p<.01　*p<.05

表6　「登校回避感情の感じ方」5群の特徴

群（N）	特徴
群1（108）	弱い部類の登校回避感情を，比較的頻繁に感じている生徒
群2（66）	あらゆる強度の登校回避感情について，ほとんど感じることのない生徒
群3（46）	あらゆる強度の登校回避感情を，非常に高頻度で感じている生徒
群4（48）	ごく弱い登校回避感情を，中程度の頻度で感じている生徒
群5（30）	強い部類の登校回避感情を，比較的頻繁に感じている生徒

可能であった。

それぞれは，どのような特徴をもつ生徒たちであるとみられるであろうか。表2の分散分析の結果から，表6のように解することが可能であると考えられた。

このうち，群2が，頻度と強度の双方からみても，明らかにもっとも登校回避感情をいだくことのない生徒たちであること，同様に，群3が明らかにもっとも登校回避感情をいだく生徒たちであることが読み取られる。

しかし，表2からみられるように，群1と群5とでは，どちらがより登校回避感情をいだくのか，単純に順列関係をみてとることはできない。また，群4についても，場合によっては順列関係が単純ではないことを読み取ることができる。

(2) 促進要因と抑制要因からみた5群の特徴

それでは，各群の生徒たちの特徴について，登校回避感情の促進要因および抑制要因との関係から考察してみる。

表5の結果から，群1と群4については，R 2乗値が低いことから，これらの要因による検討は困難と判断した。

群2は先にみたように，あらゆる強度の登校回避感情について，ほとんど感じることのない生徒である。「気分・学校外要因」が促進要因となっているのは，このような生徒が，「それでも学校に行きたくないと思うとき」があるとすれば，それは，学校外要因のような外的要因以外にはありえないことを示すと考えられる。

群3は逆に，あらゆる強度の登校回避感情を，非常に高頻度で感じている生徒である。この生徒たちは，主として家庭問題によって登校回避感情が高まることが多く，登校回避感情の抑制は「学校に行く楽しさ」が感じられるかどうか，というところに大きく左右される特徴をもっている。保坂(2000)の言う「脱落型」の不登校への危険性をもっている群とみることもできる。

他方で群5は，強い部類の登校回避感情を，比較的頻繁に感じている生徒である。この生徒たちは，主として対人的な不安や孤独感によって登校回避感情が高まることが多く，それでも「学校には行かねばならない」という社会通念によって登校回避感情を抑える傾向にある生徒たちである。従来「神経症型」と捉えられてきた不登校の生徒に近似した傾向をもっている生徒である，と考えることができる。

このように群3と群5の相違をみてくるときに，単純に，頻度ないしは強度の一方だけで，「不登校アナログ群」を単一に抽出するアナログ研究よりも，さらにきめ細かいアナログ研究への展望が開かれると考えられる。

たとえば今回の結果からは，脱落型不登校やその傾向にある生徒には，家庭状態の把握やアプローチの工夫が不可欠であり，ともかくも学校で何らかに「楽しい」と感じられる体験を（ただし教育目標から逸脱しない範囲内で）させることが重要となる。環境調整を中心としたアプローチとなろう。

一方神経症型の不登校やその傾向にある生徒に対しては，対人的な不安や孤独感の緩和が重要となる。社会通念からくる葛藤もあると思われるが，他方でそのような通念が登校や再登校への気持ちを支えている「自助」（神田橋，1990）にもなっていることに留意することが重要であろう。単純に「学校に行かなきゃと思わなくてもいいのよ」と言ってやればよいようなものではない。いずれにせよ，対話的，対人関係的なアプローチが有効であろう。

ところで，群1と群4についてはどのように捉えられるであろうか。

まず言えることは，登校回避感情を促進する要因も，抑制する要因も，明瞭なものがない，ということである。つまり，この生徒たちの登校回避感情は「なんとなく」生起したり左右されたりするとしか言いようがない，ということである。

また，表2の多重比較で注目されるのは，群1と群4については，もっとも弱い登校回避感情を除いたすべての場合に，群1の方が群4より有意に高頻度で感じているということである。したがって，「なんとなく学校に行きたくない」感情を感じる頻度に全体として差があるということである。

そうなると，群4の場合などは，本城の言うような，健康な児童生徒でも時にはいだくことが自然である部類の登校回避感情とみてよいのではないだろうか。

他方で群1は，群4と本質は大差ないが，程度においてやや大きく，「なんとなく学校がつまらない」と感じるときこそ時々あるものの，大きな不適応を起こしているわけでもないという生徒であると考えられる。実際，最も人数が多かったのがこの群なのであり，このようなあり方も，中学生としては一種自然なあり方のひとつであるとみてよいのではないだろうか。

(3) 頻度と強度とから測定する意義

以上見てきたように，登校回避感情を頻度と強度との両面から測定することによって，単純な量

的大小よりもきめの細かい分析が可能であることが示された。

特に，不登校のアナログ群の抽出において，たとえば今回で言えば群３と群５のように，それぞれタイプの異なる不登校のアナログ群の抽出への可能性を開くことができたと考えられる。これらは，従来の，頻度ないしは強度の一方のみからの測定からでは抽出しづらいものではなかったかと考えられる。

(4)　今後の課題

以上のように，頻度と強度との双方から測定することに意義があることは示されたわけであるが，一つ大きな問題が残っている。

それは，今回の結果を，どこまで一般化してよいのであろうか，という点である。

というのも，今回５つのクラスターに分かれた訳であるが，これはあくまで，今回の被験者が属している２つの中学校の生徒たちに関することである。他の学校で行っても同様に分かれるとは限らない。

そうなってくると，このような測定法が今後の研究に与える意味をどう考えたらよいのであろうか。

ひとつには，様々なタイプの学校をバランスよくサンプリングし，相当規模のデータを集めて分析することであろう。そうすることで，一般化への可能性の高い結果を得ていくことができるであろう。

他方で逆に，今回の結果があくまで２校にのみ該当することから，むしろ学校個々の，あるいはあるまとまった地域における，個別的な傾向性の測定に用いる方向性も考えられる。

すなわち，ある学校，ある地域における，登校回避感情の傾向をきめ細かくつかむことで，現場の実情により即した対応を考える資料とできる，という方向性である。いわば，学校アセスメント，地域アセスメント，と言うことができる。

たとえば脱落型の不登校やそれに近似した児童生徒の場合，登校回避感情のあり方の分布や，促進要因，抑制要因との関係性は，各地域の社会経済的要因にも左右されることが多く，どのような地域にでも通用する一般的所見というようなものは得づらいと考えられる。

むしろ，校区単位，地域単位で，個性把握的に検討することで，実情にあった認識や対応を考えていくことが適切と思われる。

これは，脱落型に限らない，他のタイプの不登校についても言えるかもしれない。ある地域において特有にみられる，従来の知見にはあまり登場しないタイプの登校回避感情のあり方もあり得るものと思われる。

個人に対する援助アプローチが，結局のところ一人ひとりの固有性を大切にせねばならないように，学校や地域へのアプローチも，個性把握的になされていく面が，今後さらに重要になってくると思われる。「格差」「地域差」などが政治経済面でも取りざたされる現今だからでもある。

その意味で今回の提案は，登校回避感情一般へのアプローチへの提案であるとともに，学校や地域の個性把握的なアセスメントへの提案でもある。既出の諸技法とのバッテリー研究や，得られた変数によるフィードバック研究，実践研究なども今後の展開として期待される。

文献

相田貞夫・一谷彊・小谷文和　1992　中学生の登校意識に関する学校心理学的研究　―自由記述法による予備的・基礎的調査―　京都教育大学教育実践研究年報，8，285-303

本城秀次　1996　「不登校気分」とは何か　児童心理，50(8)750-756

保坂亨　2000　学校を欠席する子どもたち―長期欠席・不登校から学校教育を考える　東京大学出版会

本間友巳　2000　中学生の登校をめぐる意識の変化と欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究，48(1)，32-41

伊藤美奈子　2002　不登校気分の背景にある休み時間イメージと学校適応，親友とグループの有無　―不登校予備軍に注目して―　お茶の水女子大学人文科学紀要，55，275-286

神田信彦・大木桃代　2001　中学生の不登校の背景要因の検討　人間科学研究　文教大学人間科学部，23，181-190

神田橋條治　1990　精神療法面接のコツ　岩崎学術出版社

久能弘道・打矢美由紀　2001　学校魅力を規定する諸要因の調査研究(2)　―ポジティブ•ウェイからみた不登校傾向を抑制する要因―　北海道教育大学紀要（教育科学編），52(1)，219-229

松井賢二　2002　中学生の不登校傾向意識　―学校ストレス，進路（キャリア）成熟，自己肯定感との関係から―　新潟大学教育人間科学部紀要，5(1)，251-258

松本稔・藤生英行　2003　中学生の欠席願望や欠席を抑制する要因の分析　上越教育大学心理教

育相談研究, 2, 1-16
森田洋司 1991 「不登校」現象の社会学 学文社
内田利広・盛永俊弘 2003 中学生の「学校適応感」や「逸脱願望の抑制」に影響を及ぼす要因に関する研究 ―学校生活と心理状態に関する実態調査を通して― 京都教育大学教育実践研究紀要, 3, 125-134
渡辺葉一・小石寛文 2000 中学生の登校回避感情とその規定要因 ―ソーシャル・サポートとの関連を中心にして― 神戸大学発達科学研究紀要, 8(1), 1-12